2020年度第1回入学試験問題

国　　語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注　　意

1　「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
2　問題は2ページから8ページまでです。
3　解答用紙は問題冊子にはさまれています。
4　初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
5　答はすべて解答用紙に記入しなさい。
6　字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
7　文字はていねいに書きなさい。
8　質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一　次の**文章A**、**B**はいずれも安岡章太郎『愛犬物語』の一節です。「コンタ」は最初に、「キク」は二番目に、「ハナ」は三番目に、「私」が飼った犬の名前です。これらの文章を読んで、後の問に答えなさい。

文章A

1二月十七日、東京ではことし初めて雪らしい雪がふった。二、三日、めずらしく暖い日がつづき、この日も朝、眼を覚ましたときは雨で、春先きのような暖かさだった。それがミゾレまじりになり、雪になって、昼近くから逆に冷えこんできた。

わからないものだな――、と私は思った。この日からちょうど一と月まえの一月十七日、コンタの死んだことを憶い出したからである。兼好法師は、**2**死というものは正面からやってくるとは限らない、むしろ必ず背後から忍びよってくるものだといっているが、これは人間の場合だけではない、犬の死ぬときだって同じである。

コンタはことし数え十六歳、人間なら米寿にも相当する年恰好だから、お祝いをしてやらなくてはならない。とついこの正月、皆さんに言ったばかりであった。無論、そんな老犬がこれからさき、そう長く生きられるとは思ってはいなかったが、まさかそれから二週間そこそこで死ぬとは、夢にも考えられなかったのである。

実際、コンタの体力がこの一、二年、ひどく衰えていることは、何かにつけて明らかだった。朝夕の散歩も、数年前までは三十分から一時間ぐらいずつもやらせていたが、この一年ばかりはもう二十分も歩くと、もうへとへとで自分の方から家へ帰りたがるようになっていた。それに、みちみち小便をするのでも、牡犬らしく後脚の片方をピンと上げるやり方はめったにせず、たいていは四つ肢を地べたにつけたまま、何か不安げな眼な差しで私の顔など見上げながら、やっていた。コンタにしてみれば、そんな恰好で放尿するのは、わびしくてタヨリない想いだったが、それでも片脚上げて立っているのが大儀でたまらず、自分の小便が両脚の間を流れて行く気分の悪さを我慢していたのであろう。私は、そういうコンタを見るにつけて、哀れさよりも妙に滑稽なおもいがしたものだ。何という情無しの主人だろう。

情無しといえば、あれはコンタの死ぬ一週間ばかり前のことだ。カメラマンのS氏が雑誌のグラビア写真をとりにくるというので、その前日、私はコンタを風呂場で洗ってやった。コンタは、もともと水は怕がらない方だし、とくに私の言うことはよくきくから、いつもおとなしく体を洗わせる。しかし元来は［X］的な日本犬なのだ。無闇に自分の体に触られるだけだって好きではないのに、体中に石鹸を塗りたくられて湯をぶっかけられることなんか、まったくありがた迷惑もいいところ、イヤで仕方がないのだが、主人のすることだからというのでジッと我慢していたのである。

とくに、その日は寒かった。濡れた体がすぐ乾くように、部屋には暖房をきかせ、ストーヴにも薪をたくさんくべて温かくしておいたが、風呂場には暖房はない。コンタの体に湯をかけてやると、そのときは気持よさそうにしているが、すぐに冷えるらしく、体を震わせはじめた。それでまた湯をかけてやると――こんなことは初めてなのだが――流し場で小便をしはじめた。不潔にはちがいなかったが、私はコンタを叱る気にはなれなかった。

（ああ、こまった！　相済みません、こんな粗相をしちまって……）

と言うように、私の顔を申し訳なさそうに見詰めるコンタのオドオドした眼つきを見ると、私は叱るよりも**3**自分の方が辛い気がした。コンタは仔犬の頃、まだ庭の隅の小舎で飼っていたときでも、自分のねぐらのまわりでは排泄はしたことがないくらい、シモの始末はよかったのである。それがいま、風呂場のタイルの上に垂れ流してしまったのだから、コンタ自身がどんなにか情ない想いをしているに違いなかった。

本来なら、こういうことがあれば、コンタの老い先がもはや長くはないことを察知すべきであったろう。しかし、なぜか私はコンタに死期がくるということが信じられなかった。ずいぶん弱っていることは知っていたが、それでもまだあと一年や二年は生きているものとばかり考えていたのだ。まだ、目は見えていたし、歯もシッカリしていた。そして毛艶も決して悪くはなかったからだ。それに何よりも、げんに自分の傍で生きているものが、ある日、ぽっくり死んでしまうなどということは、到底有り得べからざることのように思われたのだ。まことに、

……死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人、皆、死する事を知

りて、まつこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。

とは、このことであろう。

コンタは、しかし風呂場で湯を使ったその翌日から具合が悪くなったというわけではない。むしろわれわれの眼からは、真白く洗われたコンタは、いつにも増して凛々しく見え、食欲もあり、散歩も元気にした。それが一月十四日の夕刻、来客があり、私は一緒に街に出て食事をしたあと、家に帰ってみると煖炉のそばで寝ていたコンタが、何か吐いている。よく見ると、吐瀉物のなかに血が混っているので、かかりつけの獣医のOさんに電話で相談すると、すぐ連れてくるようにとのことだった。Oさんは、ふだんから何でもない病気を騒ぎ立て、人をおどかすような獣医ではない。むしろ、のんびりし過ぎるくらい、のんびりかまえている人なのだ。私は即刻、家内の運転する車にコンタを乗せて、Oさんのところへ連れて行った。コンタは、ふだんから車に乗るのは大好きで、ドアをあけてやりさえすれば、いつでも喜んで飛び乗ってくるのだが、この日は前肢をドアのステップにかけたなり、体を私が支えてやらなければ自分の力では自動車の中にも上れないほど弱っていた。しかし、何ということだろう。**4**それでも私は、これでコンタが永遠に帰ってこなくなるだろうとは考えられなかったのだ。

翌日、Oさんから電話で連絡があり、コンタは腎臓の機能が悪くなって、このままでは尿毒症を起こすおそれがあるので、何とか尿を出させるように努めているとのことであった。［　Y　］。風呂場で小便をしたときのコンタのやるせなげな眼つきが憶い浮かんだからである。私が「急性の腎臓炎でも起こしたのでしょうか」と訊くと、Oさんは「いや、急性というわけじゃありません。ずっと前から少しずつ機能が衰えていたのです。まァ老衰でしょうね」とこたえた。

老衰か、老衰とあっては仕方がない。普通、紀州犬は十歳ぐらいまでしか生きられないように聞いている。それをコンタは満五年近くも長く生きのびたのだ。このままイケなくなるとしても、以って瞑すべきだろう。しかし、Oさんは名医である。ことによったら、という気持は、まだ私のなかでつづいた。翌々、十七日の昼間、私はOさんの診療所をたずねた。すでに前夜から、点滴をうけているコンタは、相変らず尿が出ず、尿毒症の症状があらわれたのか、こんこんと眠りながら、ときどき小さな声で泣いていた。そして、その晩、私がOさんに電話で連絡をとり、もう一度、診療所に出向いてみると、たったいまコンタは息を引きとったばかりであった。私は茫然とした。

あれから一と月、私はまだコンタの死んだのが本当のことだと思えない。遺体を庭の片隅に埋め、家内が花と水をそなえてやっているが、私は何となくコンタはOさんのところへでも預けてあるのだという気がしてならなかった。それが、きょうの雪のふる庭を見ているうちに、なぜかコンタの死が実感としてやってきた。雪はボタン雪にちかい大粒のもので、それが絶え間なく音もなしに白くなった庭の上に降りつもって行くのを眺めていると、そこに仔犬の頃のコンタが転げまわって遊んでいる姿が眼にうつり、すると年老いたコンタの死んだことがハッキリとわかってきた。それは淋しいとか悲しいとかいうものではなく、何とも名づけようのないムナシサであった。もし私に詩才があれば、**5**そういう心持を詩に託することが出来よう。しかし私には、その才能もない。ただ、先輩の抒情詩人を口真似して、次のようにつぶやいてみるだけだ。

コンタの庭にコンタを眠らせ
コンタの上に雪ふりつもる……

文章B

犬は人類最古の友だという。古代エジプトの彫刻には、貴族がいまのダックス・フントみたいな犬をはべらせたものがたくさんあるから、その頃から犬を飼う習慣はあったわけだろう。（略）

それにしても、数ある動物のなかから、とくに犬というものが選ばれて、何千年も昔からわれわれ人間と一緒に暮らしてきたということを考えると**6**私は、何か永遠なる信頼関係といったものを感じないではいられない。コンタが達者だった頃、私は早朝、コンタをつれて、よく多摩川べりへ出掛けた。人っ子ひとりいない河原でコンタを引き綱からはなしてやると、草原の

中を真っ白いコンタが尻尾を一直線になびかせて素っ飛んで行く。そして縦横に駈けまわったあと、ふと立ちどまって主人の存在をたしかめるように、こちらを振りかえる。そんなとき私は、犬というより〝友情〟そのものが、朝霧に包まれてそこに立っているように思ったものだ。

また、晩秋から初冬にかけて、川べりにそって霜の下りた枯草の間をコンタと一緒に歩いて行くと、半分氷のはった薄暗い河面から不意に驟雨のような羽音が伝って、飛び立った雁の群れが一瞬、空を黒い斑点で覆ってしまう。そんなとき凝然と立ちどまったコンタの全身に、X の血の騒ぐのが引き綱をひいた私の体にまでかよってきて、何か狩猟で暮らしを立てていた昔の人の呼び声がきこえてくるようでもあった。

いや、またしてもコンタの話になってしまった。しかし、じつをいうと私は、この頃ようやくコンタのことを忘れようとしているのだ。

以前は、ハナを見てもそのうしろにまるでコンタの幻が立っているように、いちいちコンタのことを憶い出し、こんなときコンタはどうだったこうだった、とそんな比較ばかりしていたが、やっと最近にいたってハナはハナとして可愛がってやれるようになった。ハナがわが家にやってきて、これで一と月、今月の三日で三箇月の誕生を迎えることになるわけだ。

この一と月の間に、ハナは顔つきも体つきも、めっきり大人っぽくなった。もう夜鳴きすることもないし、首環をつけてもイヤがらなくなった。キクをここへ連れてきたのは、生後四箇月目であったが、あの頃のキクと較べても、いまのハナは体も大きく、性質もたしかに大人びているようだ。キクは庭に放しておいても家の中へ入りたがって、しきりにガラス戸に跳びつき、ガラス戸の下半分ぐらいはキクの泥足でどろどろに汚れてしまったが、ハナはそういうことはしない。

人恋しがるのは犬の特性だから、ハナも家の中へは入ってきたがるが、ガラス戸をあけておいても、勝手に中へ這入ってくるようなことはない。敷居に前肢をかけると、叱られることを知っていて、そばで人が見ているかぎり、それ以上のことはしない。這入りたいのに、じっとがまんして、両前肢をすり合せるように足踏みしている。そのへんのところが、犬嫌いの人に言わせると、いじましくてイヤらしいのかもしれない。しかし、**7** 私にはそれは、いじましいのではなくて、いじらしいのである。しかも、抱いて家の中を見せてやると、両眼をぱっちりあけて、文字通り別世界を覗いたように、驚いた顔をする。そういうところが、何ともいえず可憐なものに思われる。

可憐といえば、家族の誰かが外出するときは、庭で遊んでいても必ず、木戸のところまで飛んできて、扉の鉄格子の間から鼻先きを突き出すようにして、見送りをする。それは「いってらっしゃッい、はやく帰ってきてね」といっているみたいだ。

また、家族の誰かが外から帰ってくる場合も同じである。門前に足音がきこえただけでもう誰の足音か聞き別けがつくらしく、木戸のところへ素っ飛んで行く。そして木戸から入って行くと跳びついて喜ぶ。こうなれば、もう完全に家族の一員である。

（安岡章太郎『愛犬物語』〔ＫＳＳ出版〕より）

問1　傍線部**1**「二月十七日、東京ではことし初めて雪らしい雪がふった」とありますが、この日の雪を通して、「私」は最終的にどのような認識にいたりましたか。**文章A**を読み、解答欄に合うように、二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問2　傍線部**2**「死というものは正面からやってくるとは限らない、むしろ必ず背後から忍びよってくるものだ」とありますが、それはどのようなことについて述べたものですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　兼好法師のような文学史にその名を残す有名な人でも、自分自身の生死を正確に理解することはできないということ。

イ　ひどく衰えていたとはいえ時には元気な姿を見せていたコンタが、「私」の予想していた以上に年をとっていたということ。

ウ　愛犬コンタとの思い出を書くのに必要だった時間が、偶然にもコンタが死んでしまってからちょうど一と月だったということ。

エ　自分のねぐらでは排尿をしたことがなかったにもかかわらず、風呂場で

おしっこをしたことが、意外にもコンタの死因だったということ。

オ 体が弱っていたことを認識しつつも、数年は生きているだろうと考えていたコンタが、老衰によってあっけなく息を引き取ったということ。

問3 二つの［X］に入る最も ふさわしい二字の熟語を、次の点線内の漢字を組み合わせて答えなさい。

合 性 本 理 族 貴 野 日

問4 傍線部**3**「自分の方が辛い気がした」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア コンタが自分の状態を惨(みじ)めであると感じている。

イ コンタが「私」に対して申し訳がないと思っている。

ウ コンタが「私」に対して思いやりがなかったと反省している。

エ 「私」がコンタの抱(かか)える想いをくみとることで心を痛めている。

オ 「私」はコンタの主人としての資格がもはやないと嘆(なげ)いている。

問5 傍線部**4**「それでも私は、これでコンタが永遠に帰ってこなくなるだろうとは考えられなかったのだ」とありますが、その根本的な理由として最もふさわしい一文を傍線部**4**以前の本文中から探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問6 ［Y］に入る文として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 私はそれでもまだ楽観していた

イ 私は初めて不吉(ふきつ)な予感を覚えた

ウ 私のOさんへの信頼が揺(ゆ)らいだ

エ 私は初めてコンタの気持ちを想像した

オ 私はコンタとの雪の日の記憶をたどった

問7 傍線部**5**「そういう心持を詩に託することが出来よう」とありますが、「私」にとって「詩」とはどのようなものだと考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 言語化しがたい想いを間接的に表すもの

イ 人の心を日本的な風景美に置き換(か)えるもの

ウ 人間の一般(いっぱん)的な感情を物語として語るもの

エ 個人の具体的な経験を正確に送り届けるもの

オ 動物の行動を擬(ぎ)人化して理解しやすくするもの

問8 傍線部**6**「私は、何か永遠なる信頼関係といったものを感じないではいられない」とありますが、「私」がその「信頼関係」を感じている例としてふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 家の中に入ろうとしてガラスを泥で汚すキク

イ 夜泣きもせず首輪もいやがらなくなったハナ

ウ 朝霧の中で主人である「私」を振りかえるコンタ

エ 大昔の狩猟民族の記憶を「私」に思い出させたコンタ

オ 家族の誰かが外出するたびに見送りに飛んでくるハナ

問9 傍線部**7**「私にはそれは、いじましいのではなくて、いじらしいのである」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」は、人に見られていると家に上がってこないハナを、意地っ張りだと感じつつも、痛ましくもあると思っているということ。

イ 「私」は、人恋しがる犬の特性に関して基本的に好ましく思っているものの、家の中に上がることには嫌悪(けんお)感を抱いているということ。

ウ　「私」は、叱られたとしても、家族が恋しくて家に上がろうとするキクを、せせこましいとは思わず、可憐だと感じているということ。

エ　「私」は、家に上がりたくなったときに、我慢しないキクを意地が悪いと思う一方で、じっと我慢するハナには同情しているということ。

オ　「私」は、家の中に上がると叱られるのを知っていて我慢しているハナを、意地が汚いとは考えずに、むしろけなげだと思っているということ。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「どうやったら音楽がつくれるようになりますか？」と、時々、尋ねられる。なんとか答えてみようと考えてみる。音階やハーモニーの説明をすればいいのだろうか、いや、リズムの話がわかりやすいかも、それとも倍音の話、いやいや、そんなことがわかっても音楽にはならないな、と考え込んでいるうちに説明するのが難しくなって、諦めてしまう。**1**学校で習いそうな基礎的な知識は大事だけれど、自分で曲をつくるときにはそれ程役に立っていない。それで、なんとも**aソボク**な例え話に落ち着く。

目の前に川が流れていたとして、その川の音を声に出して表すとしたら。ざあああ、と勢いよく流れているかもしれないし、ちょろろろ、と**bオダ**やかに流れているかもしれない。さらさら、てらてら、そよそよ、しゃーしゃー、と浮かんできそうだけれど、実際に川の前に立ってみると、もっと複雑でいろんな音がしている。あちらの大きな石のところでは、ぴちゃぴちゃ、そちらの小さな段差のところは、ピロロロロ。こちらの溜まり場では、どごん、どごん。聴こうとすればする程、いろんな音が聞こえてきて、いったいどの音を『川の音』とすればいいのか分からなくなってくる。ちょっと集中するだけでも、すぐに10種類くらいの音が見つかる。さらに耳を澄まして、遠くの方まで聴こうとすると30種類、もっと細かな違いに気づきだすと100種類、ぴゃらぽぽ、ぷぷっぷ、ぽるるぽるん、まるで奇妙な微生物を観察しているように、どんどん微細で複雑で不思議な音たちが、たったひとつの川にあふれていることに圧倒される。

2こういう風に音を『聴く』ことができる時、曲が生まれる。ドミソと鳴らしてみて、ああ美しい響きだなと感じたなら、あんまりウロチョロしたりしないで、いいな、いいなという気持ちを大事にして、よくよく聴こうとしてみる。例えば、ドミソと歌ってみたら、口の開け方を少し変えてみるだけで幾通りも違う表情が味わえる。ドミソから、ドーミソになってもいいし、ドミーーーソッと繰り返しても面白い。鳥が歌っているみたいに、ああ、楽しい、身体に響いて楽しい、空気に響いて楽しい、少しずつの違いが、どれもこれも愛おしいと感じられる心になると、もう音楽が生まれている。あとはもう、ただただその時間を録音しておけばいい。後で聴いてみたら、その時に自分が抱えている気持ちや暮らしの状況がきちんと音に刻まれている筈で、表現しようと試みなくても、嘘偽りなく、いまの自分そのものがそのまま鳴ってしまっている。

「どうやったら音楽がつくれるようになるか」を探すよりも、じっと耳を澄ましたい音が既にある場所に身をおくといいのではと思う。僕はいま、兵庫県の山奥の小さな村で暮らしている。家の周りは山なので、毎日毎日、いろんな音がやってきて楽しい。この前の晩は、アオバズクというフクロウが窓の外にやってきて、ホーホーホーと美しく歌った。それで、僕もそおっとピアノに向かって静かに同じ音を奏でてみる。トートートー。しばらく待っていると、またホーホーホーと歌い返した。本当に歌い返したのかは分からないけれど、僕はそういう気持ちで、**X**をするように、一緒にこの美しい夜を生み出すように音を馴染ませてゆく。

こんな遊びを特にこの一年、ずっとやっているのだけれど、鳥や虫たちの歌をよく聴こう、相手によく合わせようと演奏すると、不思議な間の取り方が生まれて新鮮だ。自分勝手に弾きたいように演奏するのとは全く違って、ひと呼吸もふた呼吸もゆったりした間が生まれる。そうなってくると、うま

くいった日には自然の方がよく歌い出して、ピアノを弾いている自分は溶けていってしまう。身体は部屋の中にいるけれど、よく澄ました耳だけがどんどん山に分け入って、どんどん細やかな音たちが身体に入ってくる。気がつけば、身体がぬおんと山じゅうに広がった心地がして、いち音鳴らす度に山となって歌っているような。

最近は、素直に、「［　Y　］」と思っている。どれだけいい曲ができたな、いい演奏ができたなと思っても、鳥がやってきて歌うのを、風が吹いて葉が揺れるのを、村一番の歌い手マッチャンさんが昔の唄をうたうのを、100歳になったシヅさんが震える声で丁寧に昔話を聞かせてくれるのを、生まれたばかりの赤ちゃんがお母さんと目が合って歓ぶ声を、またたく星々のささやきを、耳にする度に、ほんとうに美しいと思う。ただただこのようにあれたらと思う。自分も同じように音を奏でられたらと思うけれど、どうすれば近づけるのだろう。

僕の大好きな音楽のひとつに昔から残る民謡がある。民謡は誰かに評価してもらったり大勢に聴いてもらうための唄ではない。自分の心をなぐさめるような、愛するものに優しく触れるような、仲間同士しみじみと寄り添うような、自然に魂を捧げるような、そんな唄だ。その中でも田植え唄や木遣り唄などの作業唄は、特別なよさがある。独りで唄ってもいいのだけれど、みんなで唄った時の特別な響きに**3**心が揺さぶられる。同じ村に住んで、同じ景色のなかで暮らして、同じ土や水から育ったものを食べて、同じ作業をして、同じ大変さと歓びがあって。そうやってじっくりじっくり育まれた関わり合いや繋がりの中から生まれてきた唄だ。人間だけじゃなく、他の生き物や自然をきちんと内に入れている美しい音楽だ。

朝早くに目が覚めると、ひぐらしが一斉にトゥルルルルル、トトトトトト、と鳴いていた。空気の隙間がないくらい、あまりに大量に鳴いているのを聴いていると目が開けられなくなってくる。再び、そおっと目を開けてみると、なにか、音をつかって巨大な**c**モヨウを描こうとしているのかなと思えてくる。この世に極楽を一瞬だけ生み出したような。しばらくすると、鳥たちが鮮やかにそれぞれの歌声を響かせて、新鮮な色とりどりの波紋を残していく。音の色が混じり合って、すっかり朝の気配が立ち上がった頃、太陽が昇ってきて、風が生まれた。一枚一枚の葉が輝きながら裏返って、山が揺れている。たくさんの蟬が力の限り歌い合って、どこもかしこも、愛で結ばれ合って新しい命に連なっていく。**4**耳を澄まして、どこまでも自分を開いて、受け取って、与えて、混じり合って。

（高木正勝「音楽が生まれる」『新潮』〔新潮社〕より）

問1　傍線部**a**～**c**のカタカナを漢字に直しなさい。

問2　傍線部**1**「学校で習いそうな基礎的な知識は大事だけれど、自分で曲をつくるときにはそれ程役に立っていない」とありますが、筆者が「曲をつくる」際に大切にしているのはどのようなことですか。次の空欄に合うように、最もふさわしいことばを本文中から二十字以上二十五字以内で探し、最初の五字を書き抜きなさい。

〔　　〕こと。

問3　傍線部**2**「こういう風に音を『聴く』ことができる時、曲が生まれる」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　不思議な音に満ちた川の雄大さに対して自分の小ささを感じたときのように、身のまわりの面白い響きに謙虚に耳を傾けていると、いつのまにか周囲と響き合う音楽が生まれているということ。

イ　風に運ばれてきた遠くの川の音がやっと聞き取れてうれしさを覚えたときのように、自然が鳴らした異なる表情の音すべてに愛着を感じられると、すでに本当の音楽が生まれているということ。

ウ 川の流れが発する複雑な響きの中から美しい音を発見し驚いたときのように、自分の歌声がもつ優(すぐ)れた響きを新鮮な気持ちで感じとれるようになると、独創的な音楽が生まれているということ。

エ ひとつの川の流れにも多種多様な音があふれていることを知ったときのように、自ら発する音の微細な違いにも気づき、それらを愛おしく感じられると、自分の音楽が生まれているということ。

問4 [X] に入る最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア 昔話　**イ** 会話　**ウ** 指揮　**エ** 議論　**オ** 録音

問5 [Y] に入る最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が欲(ほっ)しているものは、美しさの中にある
イ 歌い続けることで、そっと森に一体化したい
ウ 自然よりも美しい曲を、つくることができる
エ 昔を伝える唄の中にこそ、求める音楽がある
オ 本当に美しい楽曲は、自分の中に眠っている

問6 傍線部**3**「心が揺さぶられる」とありますが、それはなぜですか。解答欄に合うように、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問7 傍線部**4**「耳を澄まして、どこまでも自分を開いて、受け取って、与えて、混じり合って」とありますが、この一文についての説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ある朝目覚めた後に曲を生み出した筆者の探究心を、詳細(しょうさい)な言葉で表現している。

イ 目が開けられなくなるほどの大量の音楽に触れた筆者の衝撃(しょうげき)を、客観的に表現している。

ウ 音楽が生まれるときに筆者の身に起こっていることを、余韻(よいん)をもたせつつ表現している。

エ 蝉達の合唱の中で聞き慣れた音楽が今日も立ち上がってくるさまを、象徴(しょうちょう)的に表現している。

［以下余白］

2020年度 第１回	国　語	受験番号					氏名	

一

問1　「私」にとって

30

という認識。

25

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問9

二

問1

a

b

やか

c

問2

問3

問4

問5

問6　皆で唄っている「作業唄」の響きは、

40

であるから。

50

問7

合計